
或る政略結婚の実体

伊達 ししい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る政略結婚の実体

【Nコード】

N0441U

【作者名】

伊達 しい

【あらすじ】

初投稿です。宜しく願います。

顔もあわせたことのない王子と王女の結婚で生まれるどたばた系ラブコメディ。二人がお互いをどう認めるかのせめぎ合いを書いています。ければと思っております。

prologue : 1 side : 姫 (前書き)

このお話は最初SNDM (寸止め) 48という仮のタイトルをつけておりましたが。

あまりにもなタイトルなので変えてみました。

内容は仮タイトルまんまのコメディもどきです。

少しでも楽しいと思っていただければ幸いです。

prologue : 1 side : 姫

はじめまして伊達^{だて}ししいと申します。初投稿作品になりますがよろしくお願ひします。

一応R15にさせていただきますました。

王家に生まれたからには果たさねばいけない義務があることはわかっていた。

同じ年の乳母のリリナの娘アンナとはともに育ったが、私はいつもイイものを食ベイイものを着せられている。

つまりそれが身分の差であり、その差は唯この身が王家に生まれついたという理由でしか生まれてこないことも。

私は4歳くらいのころに気がついてしまったのだ。

それでもまだ私は気楽である、大兄さまは長子として生まれついてきたがゆえにこの国を背負って立たなければならぬ。

中兄さまは大兄さまの政務のサポートをこなし、何かあった時のスペアとして大兄さまにお世継ぎが生まれるんで毒にも薬にもならない様に目立たず存在している。

小兄さまは軍事に適性を見出されたようので日夜鍛練に励まれておられ、軍のTOPとして立てるように、努力されておられるけれど、スペアは2つもいらないので、もうすぐ臣下に下らなくてはならない。

実の兄を兄とも呼べなくなり、そのうえ兄に膝をつかなくてはならないのだ。

お姉さまはこの間、東の隣国へ嫁いで行かれた。

その後2〜3カ月に一度便りは送られてくるが、姉さまのいつもの快活な文章ではないところを見ると、妹姫に出す手紙でさえも自由にならない生活なのだろう。

お手紙通りお元気でいらっしやることを願うしかない。

私はそんな王家の5番目に姫として生まれついたので、今まできれいなドレスを着て贅沢な暮らしをおくり、何不自由なく暮らせたのも何かの時に役に立つから、以外の理由は思いつかない。

そして私の何かの時は13歳のときにやってきた。

お庭で王妃であるお母様とお茶をしているときだった。

お父様が来て、こういったのだ。

「姫や、お前の興し入れ先が決まったよ」

私は一瞬目を見開いたがまるで天気の話でもしているかのようにつづき返した。

「まあ嬉しい、陛下。それで私の旦那様はどちらの国の方ですか？」

その日から2年。15になった私は不安を抱えながら嫁ぐ国に向かう馬車に揺られている。

「どんな方なのかしら？」

私は晴れた空に向かってそうつぶやいた。

この馬車に同乗するのは我が国の侍女であるアンナとかの国のお迎えである、大臣のクラクス様。

車輪の音にかき消えるように囁くようにしてつぶやいたのだから、この質問に対する答えなど望んでいなかった。

私を知っていることと言えば、3つだけ。
隣の軍事大国ダンジールの世継ぎ王子、フィジョン様と言うお名前。
御年が私より5歳年上の20歳になられるということ。
そして、私が2番目の正妃であるということ。

前に王妃様でいらした方は、出産で命を亡くされたあげく、お生まれになった方も姫様であまり体がお丈夫でないとか。
まあ、そうでもなければ、なんの利用価値もない隣の小国の末姫なんかもありませんよね。

別に隣国まで鳴り響く美姫ってわけでもないですし。
私の役割その一は、その姫様のお相手と養育。

その二は言わずと知れた、お世継ぎ作りだけどねー。

うちの父様は愛妾を持たず、母様だけでも子供が5人。
子供が出来やすい家系だと思われて、そこが望まれた最大の理由ということらしい。

ま、いいけどねー。

フィジョンさまにはただいま絶賛お付き合い中の愛妾様がいらつしやるので、

理由その二になってます。

理由その三は、まあ政治的なこと。

私の国は小さいけれど海に面しておりまして。
タンジールから流れ込む大河、トイサ河河口の港を所有しております。

その上国土はそれなりに温かく、作物も割ととれまして、輸出もいたしております。

また海のないタンジールへの最大の輸出品は塩。

タンジールがウチに攻め込まないのはその国境が高い山脈がそびえ立っており、唯一ひらけたところは川沿いの湿地帯で馬での行軍もままならないから、ですし。

それだけの労力をかけて支配するだけの理由もないということ、同盟国扱いなのだ。

タンジールからの保護並びに同盟関係の強化のあかしとして興し入れ、ということになってます。

ま、花嫁行列のあとに塩を担いだ馬が続いていることで想像してください。

まあそんな感じで、タンジール側から「しお姫」なんて言われてることも知っておりますよ。

まあ、王族同士の結婚なんてこんなものです。

できればフィジョンさまがあまりブサイクでなく、変質的な性的趣味のないかたでありますように。

そう晴れた空に願いをかけてみる。

昨日国境を越えて、王都まであと3日。快適である馬車でもやっぱりちよつと腰が痛い。

侍女やお付きの騎士たちはもつと痛いんだろうなあ。

ごめんね、付き合わせて。

今日の宿場には温泉があるらしいよ。

ゆっくりしてね。一回熱でも出そうかな。

そうすればもう一泊位休めるよね。

熱くらい自由に出せなくて、王族なんて務まりませんのよ。

ここで臣下を休ませる理由を作るのも姫としての務めですわよね？

だってわざわざ行程に温泉保養地が入っているのは、そついでこと、
ですわよね？

お相手の王子様は次に出てまいります。
楽しんでいただけるようがんばります。

prologue side・王子（前書き）

まだ出会う前の二人の認識です。

二人の立ち位置なんかもこれでわかるかな？
と思っています。

prologue side:王子

「王子。国境のロレミアニアからアーシエラーナ姫が国境を越えた、との報告が入っております」

侍従のその言葉に、一瞬手が止まったが、うむ、とうなずくとすぐに執務を再会した。

姫ねえ。

目の前の書類の整理に没頭しながらその存在が心の片隅にひっかかっていた。

二年前に出産とともに死んでしまった正妃。

それ以来決まった妃ももたず、戯れに女を呼びつける。

そんな生活に慣れてしまったせいか、どうも気に入らない。

だからといって国境を越えた、という姫には何の気持ちも浮かんでこない。

この国は大国と持ち上げられてはいるが、軍事力を基礎とするこの国においては、弱みをみせることが政権転覆のきっかけにもなりかねない。

先の妃は有力な貴族の娘であったからもらったようなもので、なんの気持ちもなかった。

適当に相手をしていたのだが、すぐに飽きた。

足が遠のいてから懐妊の知らせを受け取った時は何かの間違いだと思った。

その間違いは、すぐに明らかになった。

妃の侍女の一人が実は女装して入り込んだ男で、その男とよろしくやっけてきた子、という話を少々脅しつけたら白状した。

そのとき、父親である騎士公爵と話をつけ、女子立った場合は姫と

して育てる、男子として生まれた場合は公式には死産として赤子は臣下に下げ渡す。とした。

そして今後一切妃の部屋には渡らないとも申し伝えた。全く、どんな育て方をしたのやら。

妃は出産で死に、生まれたのは娘でとても可愛い。

自分の娘ではないとは知っていても腕に抱いた瞬間に

『これは俺の娘だ』と無条件に思ってしまったのだから不思議だと自分でも思う。

ありがたいことに死んだ妃に似た感じに育ってきている。

浮気相手の侍女もどきの男は幽閉の上いつの間にか死んでいた。

それですこし肩の荷が降りたとおもったら、今度は王が倒れた。辛い重い病気ではなかったが、信頼篤い騎士公爵の娘の浮気がシヨックで病気の引き金になったのかも知れない。

政務はもっぱら王子である自分が行うことになった。ありがたいことに自分は一人っ子であり、有力な後継者になりそうな血縁もおらず、無事に政務軍事の事実上の権力はこちらに委譲された状態である。

父王の具合がよくないととなると、次期王妃の座が空白となる。元々社交が好きでない母は父の看病を名目に社交には顔を出さなくなった。そのため、王妃の座をねらう有名無名の貴族たちがこぞって娘を紹介しに訪れるようになった。そして火花の散らし合いのあげく、膠着状態に陥ったのだった。

誰を選んでもバランスが崩れる。こちらとて、血気盛んな若者であるから、それなりの欲望は持ち合わせており、手つとり早く処理する相手は欲しい。そんなときに手をつけたのが今の女。国一番の歌姫だった。

その女も結局権力に目がくらんで、最近なにかとつるさくなくなってい

った。

もう女はこりこりだ、と思わせるほど一触即発の緊張状態であった。そんなとき海の国とこちらでは称されるアルシエス王国の姫からの縁談が持ち込まれたのだった。

たぶん中立派のだけれかがアルシエスに妥協案としての輿入れを要請したのかもしれない。

お相手の姫は末の姫でその当時十三歳。まだいささか幼いので、二年ほど国元で育てた後、そちらへの輿し入れでいかが。と締めくくられてきた。

こちらの膠着状態を見透かしたかのよう渡りに船の他国の姫君の輿入れの申し入れである。

相手は小国とはいえ、水運ならびに貿易の相手国であり、食物の輸入先でもある。特に塩はほぼすべてをアルシエスに頼っているようなものである。決して粗略に扱われるべきでない国の姫だ。

またアルシエスは貿易で成り立っている国だけに政情不安には敏感である。戦が起これば荷物も滞る。隣の大国の内戦など死活問題になりかねない。荷物の遅延や損傷・盗難など国家レベルで貿易に力を入れているあの国では我が国の混乱は避けた買ったのだろう。隣国が女で政情不安定になるくらいならば、いつそ娘を嫁がせるか、と言う話になったのかもしれない。

そんな姫をもし宮中での権力争いなどに巻き込みでもしたら、すぐに塩の輸入はなくなってしまうかもしれない。

つまり、これは利害の一致による政略結婚以外の何者でもないのである。

大事にしつつ、子を成せ、というのがこの結婚の大命題ということだろう。

「十五の小娘か。」
二年も婚約期間があつたにも関わらず、お互い肖像画の交換も成されなかつたので顔も知らない。
知っているのは十五という年齢と、名前がアーシエラーナというこ
とだけである。

「ま、くればわかることだ。」
考えても始まらないことは考えない。

今は空っぽで妙に居心地のよい後宮を思う。
十日ほど前までは女優が居座っていてなにかと騒がしく、そのあと
は家具の入れ替えだ、荷物の整理だと何かと騒がしかったが、今は
不思議と静かによく眠れる。
この安眠もその姫が来るまでのささやかな休息なんだろう。

できれば、あんまりバカじゃなくてそこそこの容姿であればいいな。
まだ見ぬアーシエラーナ姫への思いはそんなものであつた。

1 - 1 (前書き)

本編スタートです。出会い編とでも申しませうか。

温泉で仮病を発症して微熱をひねくり出した私は、当初の予定よりも3日長くその温泉地に逗留した。

元々天気も上々予定より早く進んでいると聞いていたし、時間調整もかねていたのかな。

そのおかげか、付いてきた護衛も侍従も侍女たちも心なしか血色がいい。

馬も元気を取り戻し、心なしか馬車も綺麗だ。

それはそれで居心地いいし。

結果オーライでよかったのかな？

私もすっかり疲れがとれたし。

もし王子様が私のこと好きになれないと思うなら病気療養を理由にあの温泉地に別荘建ててもらおう。

そこで”ビバ！温泉引きこもりライフ！”を送ろう。

お気に入りの美人女優をはべらしてらっしゃるといふ噂だし、あつという間に私なんか飽きるんだらうなあ。

そしたら、”ビバ！温泉引きこもりライフ！”に突入できるからいいかも。

そんな想像をすることができると、気力も回復してきた。

明日には王都につくらしいし、どんな人なのかな。王子様。

馬車の窓から見えるこのタンジールの景色はウチとは違う。

ウチん所は窓から見えるのはほぼ農地である。

海沿いにある王城の近くは塩田がきらめいていたし、内陸に向かえば野菜や麦の畑がまるでじゅうたんのように広がってる。

トイサ河から引かれた運河からの灌漑用水がきらめいて、本当に綺麗な国だと思つて通り抜けてきた。

私の行列に気がつくのと、手を振って見送ってくれるような人懐っこい我が民。

その中を馬車は進んできた。

山脈を馬車で越えられないのはわかっていたので、途中からトイサ河を船で遡上。

一番近いタンジールの港は板でできた小さな棧橋があるだけの簡素なものだった。

タンジールは質実剛健、軍事の国である。

棧橋も頑丈に作って有事の際は敵の利便になることを恐れていつでも壊せるように簡素にできている。

と私を迎えに来たクラクス 大臣が説明してくれた。

そして船から降りた私を迎えてくれたのは、見渡す限り広がる牧草地と馬だった。

その一面に広がった光景に思わず「すごい」とつぶやいてしまった。余りにも違う。

それが第一印象だった。

感動的な牧草地帯も何日も同じような光景が広がっていればさすがに飽きる。

河沿いなど気候の温暖な地域にはそれなりに農地もあるらしいが、この国では農耕より放牧に地質もあっているらしい。

ウチより寒いらしいけど、イモも無理なのかなあ？

もし王子様が農産に興味あるならその辺も提案してみよう。

行き先に目をやると高い塔が見えてきた。

あれがタンジール王都ノクロア、別名鋼鉄の都なんだ。
そこには未来の旦那様がいらっしやるのね。
馬の足取りが心なしに軽くなってきた。
馬車が石作りのアーチをくぐっていく。
旗がなびく大通りを私を乗せた馬車が通り過ぎていく。
町の人々は、私が誰でなんのためにここまで来たか知ってもなおこ
ちらを見ない。

車窓から顔を出して手を振ろうとしたら、クラクス 大臣に止めら
れた。

「王子と対面するまで、臣下に顔を見せてはなりません。そういう
しきたりです。」

そう言つて、隣に控えていた侍女のアンナにベールを出させた。

「申し訳ありません、失念しておりました」
そういうとアンナに手伝ってもらいながらベールを身に付けた。

ベールを神経質に直しながら座っていると、馬車の速度が落ちて、
止まった。

「姫様。到着したようです」

「わかつたわ、アンナ。行くわよ」

クラクス 大臣に手をひかれ、私は幾重にも重なったベールの下で
不安と闘っていた。

ひととき大きな扉の前で一度止まった。
タンジールの言葉で私の名が呼ばれた後、音もなく大きな扉が開く。
そしてベールでばやけた視線の先に私の未来の夫、フィジョン様が
座っていた。

「姫、遠路はるばる我が国までようこそ。これほどまでに可愛らしく美しい姫を我が妃に迎えることができてうれしく思う」
そういうと壇上から降りてきてクラクス 大臣から私の手を受け取り、壇上へいざなってくれた。
私はその前で膝をおる。

「王子、麗しい御尊顔こうしてお目もじできてうれしく存じます、幾久しくよろしくお願いいたします」
見えもしない癖にこう挨拶する。

「お二人にツドリル神の御加護があらんことを」
クラクス 大臣がそう祝いの言葉を述べれば、この謁見は終わる。
そう段取りを聞かされていた。

「姫、お疲れだろう、部屋に下がって疲れをいやされるとよい。
後ほどかがって旅の様子など伺いたく思うがいかがか？」
そう王子から声がかかった。

「湯の後でよろしければ」
私は率直に答えていた。

広間はざわめきに包まれた。

私は何か失敗したらしい。

1 - 1 (後書き)

まだお互いの顔もみてません。

SNDM(寸止め)の本領発揮です！

1 - 2 (前書き)

まだお互いの顔もみてません。

どうしてこんなに皆様、動揺なさっているのかしら？

私は少し戸惑いながらも下げた頭を上げずにいた。

だって、まだ上げてよいつて言われてないしね。

足は大丈夫だけど、ベールをのせた頭が重い。

血が逆流しそう。

「姫も冗談がお上手だ」

そういつて私を助けてくれたのは婚約相手の王子ではなく一緒に来たクラクスー大臣だった。

「旅の汚れを落としてからお会いしたい、という意味でございますよね」

豪快に笑いながら成された言葉に、私の先ほどの不用意な発言がこちらでは問題発言であることに気がつかされた。

それをクラクスーはフォローしてくれたのだ。

「ええ、そのつもりで申し上げたのですが、何か冗談にでも聞こえましたでしょうか？まだこちらの言葉がうまく話せませんし、何か間違えてしまいましたか？」

私は無邪気に見えるように姿勢を戻すとおずおずと発言した。

私はまだ十五歳なのだ、そのような隠語などにも知りません、と言つかのように首を傾げてみた。

「姫の言葉はとてもお上手ですよ。ただ変に深読みした大人たちがいた、と言っことです」

そついうと、王子も私の擁護に回る。

「よかった。失敗して受け入れられないようなら塩とともにまた国に帰ってきなさいと、父に言われて参りましたから、また来た道を逆戻りかとおもいましたわ。」

こちらの国だって私を迎えねばならぬ問題があるのだ、このような

子供の言葉一つを揚げ足をとるようなことをしていれば、まだ馬の背から下ろされていけない塩を持ち帰られてしまうかもしれない、と思わせることができればいいのだ。所詮私はしお姫なのだから。

「姫、これから幾久しくよろしく頼む」

「ええ、王子様こちらこそふつつかではありますがよろしくお導きください」

この言葉が交わされた時点で婚約が成り立つ。

「婚約の証として、我が腕輪を贈ろう」

そういつて手に飾られた真新しい腕輪がはずされて私の左手にはめられた。

いままで王子の腕にぴったりに見えたその腕輪は私の腕に巻き付いたとたんそのサイズを変えて、私にぴったりになった。

少し驚いて王子を見上げると、

「するべきものに併せて変化するのだ」と小声で説明してくださった。

「私からは、」といつて胸元にぶら下げたチェーンを引き上げた。

「こちらの指輪を。お手を拝借してかまいませんか？」

そういつて王子の手を取ると、こちらの王家の紋章を彫り込ませた一見黒にも見えるほど深い紺の石をはめたものを人差し指にはめた。

「なんとすばらしい。ゼオールの指輪だ。ありがたく頂戴しよう」

そういつて臣下に見せつけるように指を掲げて見せた。

事前に聞いていたので右手にぴったりとその指輪はおさまった。

ああ、よかった。これがきつくて入らない！

とかだと困っちゃうのよね。

指輪サイズは私の親指でもぶかぶかだったんだよなあ。

手をみた感じだと、しっかりと剣の稽古もしてる堅い手だった。甘やかされたほんぼん王子じゃなくてよかった。

そんなことを思いながら、王家同志の結婚でよくみられる、『ウチってすごいんだぜ?』的な贈り物の交換をすませる、ってこと自体が表面上の婚約の儀だし。それが終わるとようやく私は退出を許されて休むことができる部屋に案内された。

やれやれ。

結局ベールが厚すぎてあんまり王子様の顔わかんなかったわー。髪の毛が金色なのはわかったけど。

謁見の間で言ったようにゆっくりお湯に浸かって寝たい。てか寝かせろ。

着替えをすませた後、晚餐なんてどれだけこき使うのよ。

まあ、晚餐の席では顔も見られるだろうし。向こうが私にがっかりしなければいいけど。

可愛らしいとか清楚とかは皆言ってくれるけど、だれも綺麗なんて言ってくれないまさに平凡な私だからなあ。

あんまり美形な王子様だと困るなあ。並んだときのバランスが悪くなるし。

そっいえば結構背高かったな。

ヒール高くしないとだめかな?

足すっごく疲れるんだけど。

これも王女のつとめ、じゃなかった妃のつとめですもの、足の疲れなど外には悟らせずにかんばって見せましよう。

私はそんなことを考えながらコルセットを締められていた。
あー苦しい。

疲れてるんだからお願い。

もう少し手加減して、アンナ。

1 - 2 (後書き)

パーツだけの王子様。
これもSNDMかと。

1 - 3 (前書き)

ようやくお互いの顔をあわせることに。
王子様の外見やいかに！

いよいよ王子様の麗しい御尊顔と御対面だわね。

先ほどの初対面では失敗してしまったみたいだし、今度はおとなしくお姫様をしなくちゃね。

あまり「裏のある会話なんか出来ません」。なんて振りしているとバカのレッテルが貼られちゃう。

それは国元のお父様お母様お兄様に申し訳が立ちませんもの。ワタクシはこう見えても、王女なんですから。

その辺のウィットの効いた会話も出来なくては、恥ですわ。

「姫様。いただいた腕環に合わせて、今日は淡い黄色のドレスにいたしましょう。」

アンナがそう言って荷ほどきしたばかりのドレス達から、春の霞のような黄色のドレスを出してきた。

「そうね、きつとお気に入りの女優様は悩殺ドレスでしょうから、私は清楚や初々しさを前面に押し出していくしかないですし。」

どうせ色気皆無のお子様ですし。」
そう言って年よりもさらに幼く見えるようなふわふわドレスに手を通した。

まだ正式に婚儀前なので、使用人も侍女も国元から連れて来た者たちが世話をしてくれている。

婚約期間のうちにこちらの国のしかるべき身分の方に侍女となっていただけなのだろう。

それまでは気楽な会話もそこそこ楽しめる。

ま、壁の裏には様子をつかがっているモノの気配もしますけど。それはまあ、お約束つてもんで気にもしません。

だって王子様に愛人サマがいらっしやるのは周知の事実ですし。それを承知で私もこの国にきましたし。

まだ私は15の小娘ですし。

発育もこの国の方に比べればわっ・っわるいっ・っし。どうせ胸小さいしっ・っ・っ。

まだ15だもん。母様位は大きくなるっ・はっ・ずっ・だもん！くそー。王子様の女の好みが巨乳なのは知ってるけど、まだ育たないものは仕方ないじゃないか。

いただいた腕環は、銀色。そこにはめ込まれたのは金色のステライト。

金のステライトは身につけている者の魔力に反応して輝く石だからね。

こっちのチカラを見極めたいって思惑もあるんだろうね。

ほどほどに光るようにこちらの魔力も調節しておいて。

さて、愛しの未来の旦那様と楽しくご飯を食べにいくとしますか。

少しは休みたいけれど、謁見から晚餐までの身支度に与えられた時間は休憩時間はとれないほどみじかいのよね。

やっぱり、大国とはいえ、武で鳴らした国はそういうところに時間を取らないのかしら。

そういう細かい作法も早く身につけなくちゃね。

やれやれ、国を背負って嫁に来るこの身は、上げ足とられ、批判の眼にさらされるの覚悟で臨まなくちゃあっという間に宮廷の暗部に取り込まれてしまうもの。

そんなことも教えずに他国に嫁にやる国があるもんなら見てみたいわ。

それでも、さらりとこちらの方が文化レベルは上なのよ。という余裕も厭味にならない程度漂わせる。

なんて綱渡りもしていますが。

晩餐会の行われる大広間までゆっくりとせずと進む。

今私の手を引いてくださっているのは、クラクスー大臣。

すっかり私の保護者みたいになってしまつて、なんだか申し訳ない。

本来ならウチの国の政治家も同行してなくてはならないんですが。

同行したのはこちらの宮廷に上がる資格のない、騎士隊長だから。

大広間まで私をエスコートできないんだよねえ。

ウチの大臣に手をひかれるより、こちらの有力者に手をひかれたほうが、

小国の姫ときつい目を向けてくるお嬢様方への牽制にもなりますしね。

しずしずと進む長い廊下には、ガラス窓と鏡が張られている。

すっかり日の暮れた廊下にこれでもか！と並んでいるろうそくの光を最大限に明るく見せる効果を狙つてのものだ。

夜だとしても薄暗い晩餐会なんてありえませんか。王宮で。

その分火事が怖い、その始末もまた王宮のプライドつてものです。

ろうそくの炎に黄色のドレスにつけられた宝石がきらきらと輝く。

こちらではあまり紡績が発達してないので、フワフワのシフォンは珍しいのだ。

このシフォン生地も実は他国には言えないルートで出来上がったいわくつきの生地だし。

技術と文化を見せつける一品となっております。

私のドレスはそのシフォンをこれでもかー！と重ねてる。
そのシフォンに宝石を縫い付けているのでふわふわのきらきら。
ちょっと、いい気分になるドレスに仕上がっている。

私が通り過ぎる廊下の端にはドレスに見とれるこちらの御令嬢たちがいるし。

顔は残念な平凡だけど、ドレスは気合入ってますよ！

まだ誰にも紹介されていないので、眼の端に入る御令嬢たちは私にとっていないも同然。

王子様に紹介された時に初めて意味を持つ存在になる。

私の今の扱いは、賓客であり、王子の婚約者（非公式）ですから。
向こうも意地悪することはできない。

この扱いが終わるのはこの晩餐会。
王子が私の手を取って紹介して周り終わったあとになる。
その短い間に私は、私の立ち位置を見極めなくてはならないのだ。

色っぽいねーちゃんたちの隠れ蓑として過ごさなくてはならないのか。

きちんと未来の王妃として扱われることができるのか。

アンナが言うには、今後宮には私しかいないそうだけれど、婚儀前にさすがに女を引っ張りこむのはと遠慮していることも考えられるしね。少し様子を見なくては。

私はクラクス 大臣に手を引かれて広間の前まで来た。

ここで初めて王子様に引き渡される。

すっと隣に立った王子様。ちらりと横目でみるとヒールを履いた私

の眼が王子様の首。

うん。いいバランスじゃない？ このヒールにしてよかった。

そしてゆっくりと視線をあげる。

どうか平均程度でありますように。

隣に並ぶのがつらいような美形でも、もう一度見るのも嫌なほどのブサイクでもありませんように。

少し日に焼けた顔。

椿の葉のような暗めの緑の眼。

そして先ほどもきがついた、きらきらの金の髪。

こうやって色の配置はいいのに。

残念なことにおめめが。

捨てられた子犬チツクに垂れ目さん……。

せめて切れ長だったら超イケメンだったのになあ。

釣り目さんだとこわくて近寄れない感じになっちゃうよなあ。

それ考えると、このくらいの垂れ目が愛嬌あつて可愛いかも。

これだけ鍛えられたムキムキマッチョじゃなかったらな！

武を尊ぶ国柄でなよなよ優男王子は無理だとしてもせめて細マッチ

ョくらいで止めておけば、バランスもよかったのに。

……つち。ちょっと残念なイケメンか。モテモテのはずだわ。

こんなちんちくりんを嫁にもらう羽目になってごめんね。

やっぱ、ポーン・キュッツ・バイーンの女優さんのほうがこの王子様には似合うわ。

って言いたくなった。

これが私の旦那様か。

私の視線に気がついたのか、王子と視線が合う。

私はふんわりと微笑んで見せた。

これからよろしくね。と言わんばかりに。

妻にはなれそうにもないけど、共犯位にはなれるし、友達になれたらいいとおもってる。

そんな気持ちを入れて。

1 - 3 (後書き)

王子様の外見です。姫様的には75点とか思ってます。
まだ口に出してませんが。

姫様を見た王子様の評価はそのうちに。

ようやく「指先での手つなぎ」までこぎつけました。

でも手袋ごしだし、義務と儀礼ですから。

・・・ノーカン・・・ですよね？

1 - 4 (前書き)

マジマジ顔をみていたら
王子様がびっくり発言を。
SNDMどころか急展開？

さて、いよいよ御対面とあいなりまして。

引き続きのお披露目の晩餐会の前です。

王子様・クラクスー大臣・私は控えの間でお互いの顔をマジマジと見る機会をえました。

まあ初対面ってことですね。

王子様も露骨な嫌悪をこちらに示してきませんし、及第点はいただけたのではないでしょうか？

たぶん、ですけど。

私からみましても。王子様は優しそうだし、それなりに教養ありそうだし、顔も背けたくなるほどブサイクじゃないし、触ると脂がしみだしてきそうなおデブでもないし。で良かったと思うほどほっとしているわけですが。

王子様的にはどうなんでしょうか？

やっぱり妖艶な女優さんとか見なれてると、私なんかお子ちゃまですよねー。

わかってますよ。でも、まだ15ですから！

頑張れば好みに育つかもよ！

あ、でもウチの両親考えるとちょっと、いやだー！頑張らないとだめかなー、とは思っけどね。

なんか、どうして黙っているのよ。

心にもないお世辞のーつや二つかまさないと、外交的にもやばいんじゃないやありません？王子様。

まだ晩餐までは時間がありそうです。

できれば一度座って休みたいのですが、王子様。

いつまで人の手握って立っているつもりですか？
私、そんなに体力自慢にみえますか？

そんな気持ちを込めて王子様の眼を見つめてみた。

人の顔みて、動かない王子様。

「あの。出来ればお時間まで少し休みたいのですが」
動かないならばしかたない、私が小声でそう告げる。
ここは少し体力ないアツピールとかないと。

この国では女子も適性があれば騎士団に入れるほど、女性の体力がある国らしいし。

そんな体力は私ないし。

そういう気遣いができないのかなー。と思った。

「・・・ああ、気がつかなくて申し訳ない」

そう言っただけ私の手を引いて二人掛けの椅子に連れて行ってくれる。

ああ、よかったやつと座れる。

ふわふわのスカートに二人掛けの椅子一杯に広げて座ろうとした時に、すっとメイドが寄ってきてお茶や軽いお酒などを視線で勧める。

「お茶を願いますか」

わたしは会話が進まない時のためにお茶をお願いした。

向かいの一人掛けに王子様がおかけになるものと思っていたのに、王子様がスカートかきわけて隣に座ろうとする。

あれ？

何考えてるの。公式ドレスの時は向かいに座ってもらわないと。

それに気がつけばまだ手、預けたままじゃん。

スカートを整え王子様の座る場所を確保しなくちゃ。

手を取り戻して私はドレスを抑える。まったく。手間かかるわね。

下手に上に座られたら、しわになっちゃっわ。

ドレスを整えようとすると、アンナがすっと寄ってきてドレスを押しさえてくれた。
目でお礼をいう。

隣に座った王子様は盛装である軍服にたくさんのモールと勲章をつけていた。

そしてふわふわのドレスの一番上、クモの巣みたいに薄いシフォンをつまんでいた。

ああ、なるほど、ドレスの生地が不思議だったってわけですね。

そりゃ、これウチの最新技術のたまものですよ。まだ門外不出ですしね。

珍しくもあるでしょうねえ。

「姫。一段とお美しい」

(ドレスが)という言葉が透けて見える台詞。

まあ社交辞令の決まり文句ですわね。でもここはちよつと頬を染めて、お礼を申し上げないと。

「・・・まあ、ありがとうございます。王子も素敵です」

・・・よし、うまく行ったわね。

しっかし、この王子声も低くて20に見えないくらい大人びてるな。5歳差で今年20歳ってことは中兄さまより2個年下なんだよねえ。中兄さまよりずっとフケ・・・いや大人びて見える。

声が低いから背中にゾクつくくるわ。

私幼くみえるらしいから、下手すれば夫婦どころか年の離れた兄弟ポジかなあ。

王子様は先の王子妃さまを、出産時に失くされてるから、その不幸がフケて・・・いやいや年上に見せてるのかもしれない。

私と並ぶとやばいよなあ5歳どころじゃない差に見えるような。もう少し大人っぽいドレスにすればよかったかなあ。

でも新作のシフォン生地を発表の場でもあるし、ふわふわドレス以外の選択肢なかったし。

まあ、ここは開き直るか。

まだ、私15だしー。

中兄さまを基準に衣装考えてきちゃったしなー。

まさかこんなに老け・ゲフン・大人っぽい方だとは思わなかったわ。

「姫、遠路よくいらしてくださいました。

仲良くやって行きたいと思うのでよろしく頼む。」

隣でワインのグラスを傾けながらそう王子がいった。

「はい、お心になうよう努力します」

お茶のカップを持ち上げながらそういった。

「姫、貴方に伝えなくてはならないことがあるのだが」

そこで言いにくそうに言葉を切る。

な、なんかあるのかしら。やっぱり子供過ぎて無理だから帰れ、とか？

私はすこしびくびくしながら少し身体の向きを変えて王子様のほうを向いた。

その視線を受け止めて王子様がゆっくりと話します。

「姫も御存じのことかと思うが、国王陛下の身体の具合があまりよろしくない。

今日の晩餐会にも出席されない」

まあ、お倒れになった言うことは正式に発表されているので聞いて

いる。

正式な晩餐にも出てこれないほどお悪いとは聞いていなかった。

「お大事に、結婚式の前にお見舞いにおうかがいしたいのですが」「私はそうするようにとお父様お母様にも言われてきてるし、お見舞いは娘になる身としては当たり前だろう。」

「いやそれには及ばない。離宮で静養なさっているし。」

結婚式には出席されると言ってきているのでその時にお逢いできるだろう。」

そこで王子の話は切れた。

ふむ、見舞いは不要と伝えたかったのか。

「父は、いや国王陛下は、私たちの結婚式を機に退位して私に位を譲りたいと言ってきてる。」

そこで一旦話が切れた。何返事すればいいのよ。

「……はあ、国王となられるってことですよね。おめでとごうございます。」

気の抜けた返事が口から洩れる。

「貴方との結婚式と同時に戴冠式になるので、そのつもりでいてほしい。」

戴冠式はまだ見たことないなあ。カッコいいだろうなあ。近くで見られるのは幸せかも。

と思ったところで気がついた。

「あれ?……ということは、私はどうなるのでしょうか。」

まさか、まさかですが。女優サマを王妃ポジにつけるので、脇で見ているとか?

「結婚式のあと続いて戴冠式をする。ということ……あなたは王妃となってほしい。」

うわー。どうしよう。そんな立派なドレスもってきたっけ？

すごい話を聞かされた時、一番最初の私の頭に浮かんだのはそんな疑問だった。

ウエディングはもってきたけどウエディングのまままで戴冠式ですか？
それはちよつとやだなあ。

あ、それともコチラ伝統の王妃用ドレスとかあるのかな？

もう少し早くそういうことは言ってよ！王子様！！

女の支度には時間がかかるんです！

私のドレスを直していたアンナが硬直している。

つてことは外交ルートでもそんな打診は一切なかったってことかよ。
無謀にもほどがあるよ。

持ちあげたままのカップに口をつけていないくらいなみなみと入ったお茶をこぼさなかったのは奇跡だったと思う。

だって、結婚式は10日後なんだよ。

どうしると？

1 - 4 (後書き)

昔のドレスは手織物。

10日で戴冠式にふさわしいドレスを作り上げるのは無理だろう。
王子様は軍服のままだからいいけどナ。

王子、オンナゴコロとか国威とか少し考えてあげてね。
武を重んじると言ってもちよつと連絡不足だと思えます。

さて、姫はどうする？

実家との距離は飛ばしても陸路3日+川の水路2日ほどかかります。

番外編 説明臭い何か『典礼について』(前書き)

説明をしなくてはならなくなりました。

説明要員をだしました。

すいません・・やらかしたかもしれません。

番外編 説明臭い何か『典礼について』

どうも始めまして。

私めはこういうものでございます。

そういつて分度器で測ったかのような15度の礼をされた。

すつと作者あたしの前に差し出されたものは

作者には見慣れたはずの名刺、というもの。

この世界に在ると設定したっけ？と思いつつその名刺を受け取る。

さて、伊達様。

このたびはわが世界を物語にさせていただいてありがとうございます。

作者あたしは、「いえ・・・」と言おうとして制された。

このたびはわが国の魔法使いの計らいにより、説明の任を仰せつかつて参りました。

しかし会話はできなくなっております。

私めの一方的なご説明をお聞きいただければと思っております。

会話になってしまいますと、双方の世界によくないと聞き及んでおりますので、

そのあたりはご了承くださいませ。

そう言つて私の前の音楽室のモーツァルトのような格好をした人は一礼した。

頂いた名刺には、透かしが入っており、その上金箔の王冠マーク。

下にはなぜかカタカナで『レナード・スパラックス』と印字されていて。

その上に書かれた肩書きは、『アルシエス王国典礼官』と書かれていた。

つまりこのモーツアルトもどきさんは今書いていてちょっと行き詰ってしまった物語の中の人、ということらしい。

うわー。あたしイタイわー。

でもどうしようかと思っている、重大な問題で行き詰っていることも確かだし。

その解決の糸口になるなら話だけでも聞いてみるか。

熱帯夜確定の気温30度からさがる気配のない午後9時。

節電のため昨夜充電しておいたノートパソコンを開いて続きを書こうとしていたあたし。

そのPCをさっさとシャットダウンしてレナードさんに向き合った。

では、ご説明申し上げてもよろしいか、伊達殿。

あたしは同意の印に、深くうなずいた。

手にはミスコピー《チラシのウラ》とボールペン。

がつつり聞く気満々です。

ただいま、伊達殿は大陸で神国を含め3番目に長い歴史あるわが国の典礼のしきたりと、末姫様が今度嫁がれるご予定の大陸の新興勢力であり、武を重んじるタンジール国の典礼の違いをどう書いたらよいかと悩んでいる、と魔法使いは判断されて、私めを遣わされたのだが、それで状況はお間違いないだろうか？

レナードさんは、手にしたメモというにはあまりにも仰々しい羊皮紙のようなものを見ながら話しかけてきた。

あたしはそれにコクコクとうなずいた。

しかし、今の説明超嫌味臭い。

レナードさんアーシエ姫のこと好きだったのかしら？

タンジールのことめっちゃ見下していたわねー。

いいもんなのかしらー。だってアチラの方が大国なんですよ？

強いらしいし。ま、あたしには実害ないし。いいか。

では、説明に入ります。

タンジールは現在の王で3代目。姫のお相手がもし即位ということでしたら、4代目となります。

建国よりまだ50年ほどになります。

へー。若い国なんだねえ。それであんなに広い土地を治められるならすごいじゃん。

レナードさんの言う言葉を昔獲った杵柄で速記もどきで書き付けていく。

メモ《チラシのうら》から顔を上げて続きを促す。

ただいまのタンジールの版図となったのは現王の時代になってからであり、その前のタンジールは、ただの地方豪族に毛が生えた程度でございまして、国交もほとんど結んでおらず、正式な国家と神国から認められましたのは、カタグ暦2064年、今よりたった17年ほど前のことでございます。

ほー。倒れちゃった方ってそんなすごい方だったのねえ。

こっちで言えば、モンゴル帝国とかナポレオンみたいな感じかしら
ー。

タンジールの現王にはお子様が3人おられ、王子一人にその姉上に
当たられる方が2名。

すべて軍功のあつた家臣かその子息に嫁しておられます。

かの国考え方では姫には相続権はなく、そのお相手の家の格に準じた扱いを受けていらつしやるそうです。

姫様のお相手になられました、フィジョン王子ですが、15歳の時に現王の右腕であつた騎士公爵、これは、かの国だけの爵位でして、武功のあつた將軍クラスに与えた称号で、その後を継いだものが従軍しなくては消滅、従軍しても軍功なきものは廃嫡という、一代限りにかなり近い称号だそうでございます。そのの、娘（当時17歳）を娶り、2年後第一子、コラリス姫を設けたが妃は出産の肥立ちがわるく死亡。姫は順調に育たれて今年3歳になられる。

ウチの姫がなんで後添えで。15歳にして3歳の子持ちにつ。

・・・失礼いたしました。

そりゃあ、アーシエちゃんの立場はつらいよねー。

で、今まで碌な国家扱いをしてこれなかったタンジールには国家継承におけるしきたり、外交儀礼などなどのノウハウが蓄積されておらんのですつ。

きつとタンジールのことですから、『近隣の諸国の代表集まるし、ついでに戴冠式もやつとくか』くらいの認識しかないと思われまます。今までの継承も、命にかかわるほどの怪我をして帰国した初代の王が二代目に血塗られた剣を渡して事実上の継承だった、という故事にならつて、その初代の王愛用の剣を渡したら『継承』としていたようです。

つてことは、会社で「まあ、後はよろしく頼む」みたいに引き継ぎの書類に判子押しして握手。で、部長交代。みたいな感じより簡単に継承されてきたつてのかい？

いい加減というか大雑把というか。書類ない分いい加減かも。

判子わたして、「じゃ、たのまー」みたいな感じにちいかいのかな？

それが王家継承だなんていい加減過ぎるよ・・・フィジョン君。自己完結しながらフムフムうなずいた。

それに引き換え、わがアルシエス国は今年で建国716年目を迎えます。

神国、クニネム国について3番目に古い国家です。アーシエラーナ様のお父上であられる現王陛下で63代目を数えております。継承式も盛大に行われます。しきたりもたくさんございまして、準備にも2〜3年の歳月を費やします。

ほーほー。そういやウチの今上陛下のときも凄い織物とか晚餐とか招待客だとかあったね。

もう20年位前だったけどかなり華やかだったわなー。

皇太子殿下と雅子妃殿下の時の結婚も華やかでしたしねー。

あれ？もしか、タンジールってものすごい大雑把にみんな集まるからいいだろう？

とか思っている？

お祝いだし同時にやっちゃう？みたいなノリなの？

それって、国家的にめっちゃ準備に時間かかるし、出席者もそれに御支度があるんじゃない？

二倍どころか3〜4倍の労力が要りそうな・・・。

あたしは、その規模とか式典の警備とか式進行の調整とか。

同時にやっちゃうの？

それとも日を改めるの？

そんなことを考えて呆然とした。

そして主役の一人であるアーシエちゃんが一番最初に心配した、お衣装。

主役それも女性のお衣装によって式典の格が決まるといっても過言ではないよなあ。

あたし設定中世末期ヨーロッパあたりっぽい感じ。にしていたし。

こんな結婚式や葬式絶対ヤダ、恥ずかしすぎつってのも何個か見えますし。

それを国家レベルで、成り上がり国家がやっちゃったとしたら。そりゃー。恥ずかしいわなー！

それじゃ済まないし。今後の外交の場で不利になるかもしれないよね。

下手すりゃアルシエスまでとばっちり、だよねえ。婚約して3年だもんね。

その間になんて指導しなかった？なんて嫌味とか言われそう。

うわー、うわー。大変じゃん！！

あたしは頭を抱えてしまった。

これ、どうやって10日で収束させりゃいいのよ。

『作者殿。姫の幸せのためがんばってくださいねー』
魔法使いの声が遠くなる。

以上、現状報告でございます。伊達殿。姫をアーシエ様をどうかお救いください。

レナードさんがものすごく美しく45度に腰を折る。

それと共にまるでTVのスイッチを切ったときのようにモーターアルともどきの姿が掻き消えた。

「フィジョンのばかやろう。爆弾発言のせいで、プロット台無しじやねえかよ」

あたしはメモ《ちらしのウラ》を眺めながらそういった。

そして人物設定をまとめてある、ノート《ネタちょう》を取り出すと。

フィジョンのページに設定を新たに書き込んだ。

閑話休題

番外編 説明臭い何か『典礼について』(後書き)

次から本編に戻ります。すいません。

1・5（前書き）

長くなりましたので2つに分けました。
評価ポイント。お気に入り登録ありがとうございます。

もうすぐ始まるはずの、私を正式に紹介するための晩餐会。その控え室で私は夫となる人にあつた。

たれ目が全体のバランスを残念にしまった、マツチヨ・メン。それがこの軍事大国の唯一の王子サマ。フィジョン殿下。で、私は10日後にこの人と結婚することになっていて。

私が頭の中で走馬灯をグルグルめぐらしているのは、その結婚式と一緒に戴冠式をやると、この残念なイケメンマツチヨ、略してザツチヨ、がこんなところで言い出したから。

そして、戴冠式の話は、私、すなわち結婚相手であり、『ついでに王妃にならねえ?』と言うべき相手にはまったく知らされてなかつた上、おそらく両親にも伝わっていないだろう。

ということは、この国は私を、私の祖国をないがしろにする、と宣言しているようなもの。

しかし、面と向かつてこの王子を叱責するわけにはいかない。ここで争いなど起こせばそれこそ外交問題になる。

たとえそれが義憤によるものだといえども、だ。

私はゆっくりと手に持ったティーカップをソーサーにもどす。

ここでどう対処するかによって私の評価もアルシエスの評価も決まってしまうかもしれない。

なんか、もしかして試されてる?私?

この国に入った時点で私は、良くも悪くも『殿下のヨメ』であり、この国に属するものともなる。つまり、面と向かつて王位継承者を叱責することは不敬罪で処分されても文句はいえないのだ。

もしこれで近くの警護の兵士などに当り散らせば、祖国の評判を落

としかねない。

私が直に叱責しても大丈夫なほどの高位の者。

そこに、いるじゃない。

私は内心ほくそえんだ。

バシン！

私は怒りを込めて手にした扇で椅子の肘掛をたたいた。

その音に部屋にいる全員が目が集まる。

ターゲットも。

私は押さえに抑えた怒りを声にした。

ちよつとまがつてしまった扇を少しだけ広げて口に当てると、ターゲットとなった男をにらみつけてゆっくりと口を開いた。

「クラクスー大臣。これはどういうことですか？

このような大事を私を迎えにいらっしやるとき一言もおっしゃいませんでしたわよね？」

確かにアルシエスは小国ですが、このようにないがしろにされるとはおもいもありませんでしたわ。」

私はクラクスーをしかりながら扇で片目でチラリと王子を見やった。王子は私の言うことを聞いてはいるが、その表情に変化はまったく見られない。

つまりこれは、アルシエスを属国とみなして格下の扱いをしていると王子自身がいつているようなものなのだ。

焦るとか、取り繕うとかそういう行動は一切ない。

それどころか何で私が怒るのかわからないというかのようにこつちをみてきた。

この人、何考えているのかしら。

でも、ここは抗議しないと外交ならば対等が基本。

対等に扱う必要もないという、意思表示なのだとしたら。

ここは怒りを見せておかないと、でもキーキー怒っても大人気ないし。

そうだ嫌味よ！嫌味がましてやるわ！！

クラクスー大臣が言い訳をしようと口を開きかけた途端。

第二の爆弾が王子様から投下されることを私たちはしらなかつた。

1・5(後書き)

どれだけ、王子視点なしで行けるか。
変な意地になってきています。

1・6（前書き）

行事というのは、行事が始まる前までに八割の作業が終わっている
もんです。

ですから、前置きは長いのです。

「大丈夫だ。姫の国をないがしろにしているわけではない。戴冠式のことを知っているのは王・王妃・俺以外では姫、あなたが始

めてだ。」

扇をもっていない手をとって王子が言った言葉にまた私は固まりかけて、なんとか自分をたもった。奇跡的に。

目の前が少しチ力チ力する。気を失わなくて本当によかった。

この人は招待客に伝えるという最低限のマナーすら知らないってこと、なのかな？

「王子、それ、冗談です、よ、ね？」

手の中で扇が悲鳴をあげるかのようにミシツといった。

「冗談ではない。今日晩餐会のスピーチで発表の予定だったのだが、それでは姫にフェアではないかと思って先に知らせたのだが

」。

「あ、ありがとう・・・ご、ざい、ます？」

少しでも早く知らせてくれたことはありがたいのだが。

これはありがたいところなんだろうか？

晩餐会で倒れるよりマシってところかしら。

それよりも気になることがある。

「あの、王子様？」

お礼に疑問符が付いていることに気が付いた王子様が私を見る。

その視線にちよつと戸惑いながらもう一度疑問を投げかける。

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんなりと、姫」

「あの、いつ戴冠式をやるって御決めになったのですか？」

「ああ、3日ほど前だったか」

「はかー。4日ほど前の私本当にはかー。」

温泉でピカピカツルツルになってる暇なんてなかったじゃないかー。せめてその時点で知っていたら。もう少し何とかできたのに。

温泉でのんびりしてる暇なんてなかったじゃないの！

てか決まったら早馬でもなんでもいいから教えてくれればいいのに。

私は自分が悔しくて、少し涙目になりながらも王子を見上げながらにらみつけた。

すこし王子がひるんだのみていい気味だとおもった。

「戴冠式と一緒にやろうと思ったのは、国王陛下を見舞いに行った時に陛下のほうから譲位を伝えられて、一緒にやった方がいい

のではないかと城に帰還してから思いついたのだ。その了解を得るために陛下と手紙でやり取りしていた。

すまない、浅慮だった。貴方にも伝えるべきだったのだな。」

私にもだけど、周辺諸国にもだるー！

という叫びを私は飲み込んだ。

せめて、此の事をアルシエスに伝えないと。
手の中の扇を握り締めると、キシツと音をたてた。

「王子、申し訳ないのですが、ちょっと打ち合わせを侍女としなくてはなりませんので、晚餐を10コニほど遅らせていただけな

いでしょうか？」

「何か、必要なのか？」

王子が心配そうにいう。

必要なものだらけだよ、決まってるだろ。

戴冠式の衣装どうすんだよ。国許にも連絡しなくちゃいけないし。時間が惜しいんだよ。

「ええ、実は扇を壊してしまいました。侍女にとりにやりたいと思うのですが。」

そういうと今まで手に持っていた扇をアンナに渡した。

「お兄様にもらった物をもってきてね、アンナ」

そういうと、アンナはすっとお辞儀をして出て行った。

こうして行かせてしまえば、晚餐は延期せざるをえない。

開始の遅れを伝えるために何人かの侍従もアンナとともに出て行った。

ごめんなさい準備にあたっていらっしゃる方々。でも王子様が悪いんだからね。私を怨まないでね。

『おにい様にもらったものを持ってきてね』っていうのは重大事がおきたときに使う、アンナと二人の間で決めた暗号みたいなものだ。国許に連絡を。という意味になる。

そうして王子に向き直ると、私は普通の笑顔を貼り付けてきいた。

「お待ちさせる間、お伺いしたいことがあるのですけれど。」
私たちが歓談体制に入ったのを見ると、クラクスーが侍従を呼んでなにやら密談している。

結婚前の私たちを二人にするわけにはいかないものね。

侍従やメイドがいるけれど、彼らはとめる権限をもたないしね。

侍女でもあり、貴婦人でもあるアンナが帰ってくるまではお目付け役としてクラクスーは動けない。

さまあみさらせ。おほほほ。

「なんなりと、姫」

王子がこちらをみる。

しかし、きれいな緑の目だなあ。うらやましい。

そのきれいな目に映る見栄えのしない自分が目の中に浮いたごみのように感じる。

姉さまくらい綺麗だったらよかったのになあ。

こんな綺麗な目に映るのは正直いたたまれない気持ちになる。

「まずお伺いしたいのですけれど。」

姫君にいつお会いできますか？」

その途端王子の目が少しつりあがった。

やべ、地雷？

ここは知らぬ存ぜぬで15歳の少女のふり。

「私、母としてではなく、お友達か姉妹のように仲良くできたらと思っています。」

丁度、大兄さま・王太子殿下のお子様が同じ年ですし、国許でも

なんどか遊び相手を務めたりいたしましたのよ。お会いできるのを楽しみにしてまいりましたの？王子に似ていらっしやいますの？」「

3歳だっというし、可愛い盛りの子だというし。

色々おもちゃやドレスなんかも持ってきたしね。

なんか、王子どころかクラクサーの表情も冴えないけど。どうしたのかしら？

「姫。娘は・・・そうだな、かなり人見知りが激しいのだ。

それに・・・身体もあまり丈夫ではない。

式が終わったら逢わせるつもりでいたのだが。」

歯切れが悪いわね。なにかあるのかしら？

まあ、おいおいわかるでしょう。

「そうでしたの。よく存じ上げないのに浮かれてもうしわけありません。

わたくし、末っ子でしたので、妹ができるのだと思って楽しみにしておりましたの。

浮かれて申し訳ありません」

私も少し寂しげにしてみる。

この国、少なくともこの姫は色々ナーバスになるポイントなんだろうね。

今度から気をつけよう。

「いや、姫、やさしいのだな」

そういつて私を見る。

くそー、なんだその「とってこいを褒めて？」といってる犬みたい
な瞳は。

「いえ、よく知りもしないで出すぎた真似をいたしました」
そういつてとりあえず笑った。
娘という地雷があることがわかっただけでもここはヨシとしよう。

1・6(後書き)

10コニ(時間単位)＝1コニ5分くらい。

つまり一時間ほど落ち着く時間がほしいってことですね。

あと姫さまは「番外編」の内容をご存じありません。

1・7（前書き）

色々資料を読んでいたらよけいに頭が混乱しました。
戴冠式・結婚式の資料は本当に読んでいて楽しいのです。

「あの、殿下。お伺いいたしたいことがまだまだたくさんあるのですが、続けてもよろしいですか？」

私はふわふわに重なったシフォンチュールのドレスのひだの中からメモ用紙と簡易ペンをとりだした。

初めての晩餐会のしきたりの違いをメモするためにもってきたんだけど、今使わずにいつ使う！的なものになってしまった。こっさりメモポケット作ってもらってよかった。

ドレスメーカーのスーリア夫人には、

「普通なら化粧道具入れとか、ハンカチ入れ、サツシユ入れとかの可愛い隠しポケットの依頼だったり、アヤシイところでは護身用ナイフ入れとか、百歩譲ってあんなこんな薬入れとか、をドレスに仕込んでくれ、って言うならわかりますけど。姫様。メモ用紙入れとインクが染みださないようなカバーとか……。ホント色気も素っ気もない依頼をくださいますよね。」とため息交じりに呆れられたものだが、作ってもらって本当によかったわ。

もう外聞なんてかまってるらるか。

あと10日で人生の一大イベントを2個同時にこなさなくちゃならない上、ここは完全アウェイ。

右も左もわからない場所ときたもんだ。

誰に何を頼めばいいのかもわからないし、そもそも私に指揮権が少しでもあるのかもわからない。

そんな場所で、諸外国の要人の目の前で失態なんかできるものか。

国元じゃ、典礼の姫とか呼ばれて、何かしら行事がある時の女性のドレスコードの基本とも言われたくらいで、そのためにいつも誰よりも一番に式典用ドレスも発注しなくちゃならなくて大変だったん

だから。

そんな私が、場違いでハズしたドレスなんかで式典に参加なんかできません。

私のアイデンティティの問題なんだから。

断れるものなら断って見る。塩とともに荷車に乗ってでも帰ってやる。

そんな決意をまなざしに込めながら王子に対した。

こうなったら多少のマナー違反は目をつぶらなくちゃね。

結婚前の男女が同じイスに腰掛けているだけでもすでに十分、マナーに反しているんだし。

王子はゆったりとグラスを揺らしながら私にうなずいて見せた。

なんだコイツこの優越的な態度は、本当はオマエが一番あわてなくちゃいけないじゃねーの？

内心むっとしながら声には出さないように質問を続けることにした。かんしゃくを起こすのはいつだってできる、いまはこの状況で少しでもいい方向に持っていくことができるように行動しなくちゃ。

恥をかくのはコイツだけじゃない。

私や国元も恥をかくことになるんだし。

もし少しでも恥をかくようなことがあったら聖堂前離婚してやる。

頭の中でもすごい悪口を目の前のマツチヨ王子につきつけながら、私は曖昧な微笑みを浮かべて王子に質問することにした。

「この国のしきたりについて知らないことが多いのですけれど、戴冠式とはどのようなになるものなんでしょう？」

我が国では神国よりそれなりの神官殿をお呼びして戴冠してもらい、近隣にも知らせをしたりしてかなり盛大にやるもの、ときいており

ますけど。そういうしきたりに詳しい官職のかたとかはこの国にはいらっしやいませんの？

「ぜひお会いして、この国のしきたりなどきちんとおうかがいしたいんです。殿下に恥をかかせたくはございませんので。できれば本当に今すぐに。」

「今すぐ？そんなにいそぐのだ？なぜ？」

王子はそのたれ目から繰り出される視線は睨みつけてるようだけれど、お預け食らった犬のように首をかしげてるところでその威力は半減しとるわ、必要だからに決まってるだろう。

「私も式典の当事者です。それも戴冠式的时候は殿下のおそばにいらなくてはなりませんでしょう？」

「慣れない進行で失敗して恥をかきたくはありませんもの。」

「すくなくとも式次第が詳しく知りたいんじゃない。式次第の内容を見れば大体なに着ればいいのか見当がつくんだよ。おしえろや。この鈍感ザツチヨメンめ。」

「ああ、それなら心配することはない。」

「なにそれ。たつてりやカカシでもいってことですか？」

「私が首をかしげていると、また近距離で爆弾が落とされた。」

「しきたりなんてものは、この国にはないからな。だからしきたりに詳しい官職などおいてない、あえて言えば父上母上か。」
それを聞いたとたん、目の前が暗くなった。

「なんですとー！」

視界の60%位が暗くなった。久しぶりに倒れると思った。前のめりにぐらつく、ヤバイ。

「姫様」

ふらついた私を支えてくれたのは目の前のマッチョではなく、侍女のアンナと一緒に駆けつけてきた、騎士団長。その腕の中で彼にだけ聞こえるようにひとことささやくと私はゆっくりと身を起こした。途中で、隣の王子殿下を一瞬睨みつけた。

このザツチヨ。役に立たたねえ筋肉ばっか付けやがって。隣に座ってる女一人ささえられねえのか。

どんどん私の中で未来の旦那様に対する点が辛くなっていくのはなぜでしょう。

1・7 (後書き)

どんどん姫様の口が悪くなっていきます。
どうしてなんだろう・・・。

1 - 8 (前書き)

お読みいただいております。

お気に入りに入れていただいたり、POINTもありがとうございます。

何よりも励みになります。

さて、ご招待する時、席次や招待する人を絞り込むのは大変です。

最近のマナーやしきたりを軽視する方も多いですが、その決まりごとがどうして今まで受け継がれてきたのかとか考えるのも新しい視点を手に入れるチャンスだと思います。是非色々調べてみてくださいね。

「では、殿下。私を式典の責任者にしていただけないでしょうか？」
私の口から滑りでた言葉に自分でも少しびっくりする。
でも、考えてみるとそれが一番いい方法のような気がしてきた。
騎士の肩にすがりながら身をゆっくりと起こす。
そして、なるべく目に力を入れて王子様に訴える。

その滑り出た私の思いつきの言葉に私を支え起こしてくれた騎士が
一瞬ちよっただけ身を固くする。

「ごめん。あとで説明するから、お願いまかせて。」
私は彼から身を放す瞬間こっそりそうささやいて先ほど作ったメモ
を肩当てと方の間にさしこんだ

「ありがとう。カルロ。今頃旅の疲れが出たのかしら？少しめまい
が。」
そう言つて勢いをつけて身を放した。
そして支えてくれた礼に微笑む。

「いえ、間に合つて何よりでございます、姫。
お加減の方は大丈夫ですか？ 晩餐会を中止にさせていただいたほう
がよろしいのでは？」
本当に心配そうに私の前に膝をついたままカルロがそう進言した。
その手はまだ私の肩を軽くつかんだままだ。
それなのに彼の視線は私ではなく隣の王子にくぎ付け。
なんか周りの気温が下がったような気がするんですけど。
もしかしてにらみ合ってる？ 私からはみえないんだけどー。

「大丈夫よカル口。まだ始まるまで時間もあることですし。」
そう言つて彼から身を少し放した。

私は多分にらみ合つたままの二人が放つ空気がどんどん冷えて行くのが怖くて、とりあえず間に入つてみたんだけど、なんか余計冷えた気がするよ。

二人にそれぞれ視線を投げかけると二人かららみ返された。なん
で？

ちよつと状況が呑みこめずに困っていると、後ろからスツと扇が差し出されるとともに優しい声がかげられた。

「姫様。」

アンナがそう一言声をかけてくれたので、ほつとして微笑みながらアンナを見る。

ありがとうアンナ。視線に感謝を込める。

そして、アンナから差し出された新しい扇を受け取つた。

その扇を優雅に音もたてずに開いて、口元に持つていく。

「しかして、殿下。おまかせいただけますの？」

言葉を選んで、それでも優雅さと無邪気さは失うことなく威厳を込めて。

ふんわりとした微笑みを目にしっかりと宿して。

しかしその口調は毅然と。

”断れるもんなら断つて見やがれ。”という思いを込めて。

ぶつちやけ言わせてもらうと、曲がりなりにも自国で『典礼の姫』
とまで呼ばれた私が。

こんな典礼の初歩の初歩も知らない国がみすみす目の前で私を巻き込んで大失態をやらかす片棒を担ぐのはまっぴらなの。

近隣諸国だって、私にお伺いの手紙をよこすことだつてあるのよ？

みつともない結婚式や戴冠式なんかやらかしたら、評判ガタ落ちのうえ後ろ指さされるかもしれないじゃないの。

この王子サマのマナーもなってるないし。

このままこの人が国王となって外交儀礼がちゃんと出来るとは思えないのよね。

すくなくとも私がこっぴどくかきしい思いをしない程度には取り繕っていただかないと。

とりあえずは、この100日で。

「もしお断りになるようでしたら、きつと私より式典その他諸々に精通していらっしやるのでしょうかね。是非ご紹介いただきたいものですわ。」

にーにーにーにー。

覚悟しとけよ。王子サマ。

典礼の姫と国内外でお世辞やおべっかで呼ばれていたわけではないんですのよ。

「あ、私の指示を聞いてくださる官吏ももちろん、付けていただけるのですわよね？」

そう駄目押すと、広げた扇を一瞬でたたむ。

そして、今気がついたかのように、魔時計に目をやる。

「あら、丁度100コ二経ちましたわね。晚餐に御案内いただけますか？」

そう言っつてすつと手を差し出した。

悔しそうに睨みつけたところで、そんなもん何の役にもたちませんわ。

交渉は駆け引き。

剣よりも口先のほうが強いこともあるのですから。

あらあら、空のグラスを握りつぶすなんて。

私の王子さまは、なんて野蛮なんでしょう。

1 - 8 (後書き)

20歳の男子(子持ち)が15の小娘に言い返せないのはつらいだろっね。

ごめんね。王子様。次回は王子様のターン・・・になるといいね。

(希望的観測)

1・9（前書き）

ようやく晩餐会の開始〜〜

基本は日本の宮中晩さん会の様子をもとに書いております。
間違っていたり、適当なところもあると思います。

しかし、ザツチヨとツン姫で「あまあま」になる（予定）がどんど
んずれて・・・

私の差し出した手を立ちあがった王子さまがとる。
その手を支えにしたように立ち上がる私。

でもね、本当の淑女は全体重を相手に任せたりしないのよ。
ふんわりと体重の三割位を相手に預けて立ち上がるのさ。

淑女は、自分で立ち上げられるだけの体力を持っている、細マッチョが基本ですわ。

もちろん柔らかいところは柔らかく、ですけれどね。

私が立ち上がるのを見計らったかのようにファンファーレが鳴り響き、晩餐会場への扉が開かれる。

さあ、正式なお披露目の始まり始まり。多分完全アウェイだけど、頑張るよ。

開かれた扉の先は今宵のための大広間、晩餐会仕様になっているはず。
っことはこの国がどういいう感じで公式の場をしつらえているかわかるってことよねー。

まあ基本は3パターンだからそこからバリエーションをかませるか
どうか、がセンスの見せどころだよねー。

この国はどうもてなすつもりなのかなあ。

晩餐会会場には、聞いた話では二、三百人のこの国の貴族。それに近隣諸国の大使の姿。

私の提示した100コニの間にある程度の情報は彼らに伝わっただろうか。

まあ、どこの国も諜報活動はしてるだろうから、ある程度の情報はつかんでいるんだろうけれど。

私はその中をしずしずと進みたかったんだけど！

私の手を引くこのザツチヨ王子サマがズツカズツカ大股で歩くもんだから、こちらは小走りになってしまった。

小走りだって優雅に歩いてるように見せますわよ。

それぐらいできなくて、どうします？

この戦馬鹿、少しは女に気を使え。

エスコートもできなくて前のヨメはよく我慢したな。

もしかして、扱いが荒くて繊細もしくは病弱だった先妻さんは儂くなっちゃったのかしら。

てか、この行動はもしかしなくてもさっきまでの控室でのイヤミへの意趣返し？

だとしたら王子サマ。相当ガキくさいわー。

あつという間に主賓の席に着く。

ゆったりと手を放し・・・とかおもったらザツチヨ、振り切りやがったよ。

こんな衆人環視のなかで、こんな心のままにふるまっていたら格好の噂話のエサになるじゃねーか。

ま、それならそれで。

必殺『実家に帰らせていただきます』か

小柄で年より幼く見られがちのこの容姿を利用して『王子サマが苛

める』『大きすぎて怖い』とか震えて見せるのもいいかな。表面を取り繕えなくて損するのは、どちらにしろザツチヨ王子さまだしー。

さて、まず、ワタクシ達の婚約を祝うスピーチが両国代表からあり。そのたびに乾杯。にっこりとほほ笑んで皆様に御挨拶。

なるべくバカっぽく、幼く、そしてトボケて見えるようにね。

そしていよいよ。

大問題の王子さまからの御挨拶。

まさか、この王子さま、スピーチできないとかないわよね？その可能性に目の前がちょっと暗くなった。

スピーチ用の原稿を取り出すのかとおもいきや、残念なマツチヨの王子さまはそのまましゃべり始めた。

おいおい、覚え暗記しているとしても、カンペ位用意しようね。今までの大使達だってカンペチラ見しながらやってたでしょうが。彼らの立場考えてやんなよ。つてかコイツ、もしかしなくても俺様属性なの？なんて面倒くさい性質なの！はらはらしながらそのスピーチを聞いた。

王子さまは非常に偉そうに上から目線で婚約の祝いの礼を述べる。そこからスピーチは始まった。

まあ、国内中心の席だし。合格すれすれ、六十五点。

両国の未長い平和と繁栄を……祈らないの？

いきなり、戴冠式を同時開催を発表かい！

各国大使に国元への連絡を要請。

もう代表団国元出発しちゃって間に合わない国もあるとおもうんですけどー。

ダメダ……ダメダコイツ。

比喩ではなく本当に傷み始めた頭を抱えそうになりながら遠い目で、国元のお父様・お母様を思う。

とうさま、かあさま、ワタクシやって行ける自信がありません。帰ってもイイデスカ？

そんな物思いにふけて、魂を実家の両親のもとへ飛ばしていた私が現実に戻されたのは、未来の旦那様がいきなり乾杯！をやらかした時のこと。

こんなにぼんやりしていなければ止められたのに、と悔やむ。

冷たい視線を隣の未来の旦那様に名流す。

もう、点数……どんなに甘く点つけてもマイナスなんです。しきたりもなにもあったもんじゃないわ。

飯にも「王室主催」の「晩餐会」でこんなグダグダが起こるなんて！こうなったら何としても、あと9日でマナーやしきたりをこの戦バカに仕込んでやるわ。

『典礼の姫の名に賭けても！!』
私は心の中で握りこぶしを握った。

あと9日。

もう少し洗練された晩餐会を結婚祝賀の際には開いてみせますと
もさ。

乾杯が終わったところで、私は席につくと、ペンと紙を取り出して
せつせとテーブルの下でメモを取り始めた。

必要なもの、宮廷での付け焼刃でも構わないからの教育。
最初のメモはそう書きつけられた。

私の手元が見えるのは隣に座った王子さまだけ。

その王子様は私に背を向けて、私のすることなんてどうでもいいと
いう不貞腐れた態度でお酒をかつくらっている。
酔って醜態をさらさなければどうでもいいです。

私の邪魔だけはしないでくださいね。

さて、リネンの新調の確認・・・カトラリーのチェック・・・ご婦人
の洋服のダサさもなんとかしないとね。

軍服・モールとかもちゃんと人数分あるのかしら？

いざとなったらウチから連れてきた兵士を使いましょう。

あとは魔法使いに連絡をとって、無理でも色々転送してもらわな
くちやね。

あ、この国に転送の魔法陣・・・あるのかしら？

にこやかにあいさつに答えながら私の両手は食べるよりももっぱら
メモに費やされた。

1 - 9 (後書き)

ザツチヨ、サイテー。
が姫の印象。

なんだこの小うるさい小娘は。
が王子の印象。

ほんと糖分はどこに・・・ごめんなさい・・・

1 - 10 (前書き)

間があいてしまいました。

ヨーロッパの国のマナーもその国によって微妙にちがうんですよ。
ちなみに日本は英国準拠、ちよつとロシア入り。だそうです。

さて、とりあえず挨拶も終わり、楽しいお食事タイムの始まりです。色々視線を感じるけどそれはまあ、ほおっておこう。色々ストレス感じるとご飯おいしくないしね。

それでも私はさりげなく周囲を見回しながら料理を口に運ぶ。ウチの国はここよりも温暖で海洋国家でもあるので、それまでのこつてり系煮込み料理よりも素材の味を生かしたシンプルな料理法がはやってる。

しかしこちらでは素材の問題などもあってそうもいかないだろう、手の込んだこつてり系ものが多い。

味が濃い、塩味がきかせない分油分でこつてりと料理されていることが多い。

いや、コースのうち1つとか2つならまだ食べられるけど。

まず、チーズふんだんにかけた温野菜サラダ（つまりグラタン一歩手前）。

次が川魚の素揚げ、あんかけソース（つまり油味）

次がメインのお肉。なんでこんなに厚く切った！って感じの焼いて塩かけただけのもの。

ここまで来て私の胃は悲鳴を上げた。

ただでさえコルセットで絞めてるのに、入るわけないじゃないのっ。

おなかにたまってしまうし、口の中がなんか油っぽい。

お酒で流し込むザツチヨにはこれでいいかもしれないけど、あたしにはきついわ。

お肉を頑張って三分の一くらい口にしたところで、そっとカトラリーを置く。

給仕が寄ってきたので、相談してみることにした。

「わたくし、まだお酒はたしなみませんの。口をすっきりさせる飲み物などありますかしら？」

乾杯のとき少しだけ傾けたグラスを示して、お水を要求する。

給仕は一瞬固まってから頭を下げてそそくさと下がっていった。

水はウチよりいいはずだし、楽しみ。

早くお水~~~~~。

口が粘っこいよ。塩っぱいし。

さて、次のお料理がくるまでは観察を続けるかな。

私の近くに座ってらっしゃるご婦人方のドレスのデザインは、と。ウチからみたら3〜4シーズン遅れ。

私が10歳のお披露目の時に着たドレスとそっくりなドレスを着た妙齡な、というか年増のご婦人がいらっしゃる。

べ、別に自慢じゃないが、あのデザインは幼児体型の10のこともだから似合うのであって、

もう社交界デビューを果たしたお姉さまが着るものじゃないと思う。はつきり言って痛い。

また隣の娘が着ているのはそのとき姉様が着ていた顔立ちがはつきりした美人限定（まちがっても私じゃドレスに負ける）のデザインだし。

はつきり言って似合っていないなあ。せめて色だけでももつと自分に合う色にすればいいのに。

他にも私や姉や母様のドレスをコピーした人がおおいなあ。

なんか恥ずかしい。

しっかし、これをドレスメーカーのリリが見たら卒倒しそう。つか片っ端から剥いで説教だな。

リリは今どこにいるんだろう。一応私の侍女としてつれて来たけど、もしこんなところ見たら凄いことになりそうだわ。

そして、心のメモ帳に『リリには舞踏会を見せないこと』という文言を刻んだ。

しかし、お水まだかなあ。

ぼんやりと、しかし微笑を絶やさぬまま、私は観察をつづけて、お水の到着を待っていた。

「姫、食が進みませぬか？」

そういつてダメ出しメモをせつせと心に書き留めている声をかけてきたのは、ええとさっき紹介された、だれだっけ、ああ宰相閣下。

「いえ、わたくしお酒をたしなみませんので、お水をお願いしたところなんです。お料理は本当においしゅうございます。」

そういつて微笑み返す。

まさか油っぽすぎておなかいっぱいともいえないし。

「ああ、姫。気がききませんで、申し訳ない。」

そういつてそばの給仕を呼びつけると、水の催促をしてくれた、いい人だ。

少なくとも王子よりは気が利くな。そう思つてチラリとザツチヨ王子をみると、やはり自分勝手に飲み食いしてる。

もういい、お前には期待しない。

「さて姫。」

あれえ、社交辞令でおしまいじゃないの？

「正直にお伺いしたい。」

やだなー。ご飯のときに真剣な話するとまずくなるじゃん。

「典礼の姫と呼ばれて名高い姫から見てこの国の作法はいかがだろうか？忌憚なく言っていたらよかった」

えー。やだー。

一番最初に思っただのはその一言だった。

本当に忌憚なく言ったら、外交問題に発展しそうなくらいなダメ出しできますよ。

それでもよろしいのかしら。

まあ、外交に差しさわりのない程度で嫌味を交えて、くらいかねえ。

「そうですね。」

淑女の皆様方がわたくしを歓迎する意味で、わたくしの以前のドレスデザインのものを着ていただいているのに感謝いたしますわ。

特に、王子殿下とのご婚約がなりました10歳の時のドレスなど懐かしくまたその皆様のお優しい気持ちがうれしいですわ。

また、紳士の皆様方のお作法は、お血筋から考えますと、北方の古の大国フェルナータの儀礼にそっているものと思っておりますら、お皿の並べ方などが国と似ておられる。

また、晩餐会の進行などは、どちらかといえば、わが姉の嫁いだ西の国のようですね。

結婚式や戴冠はどのような典範でおやりになるのか、お聞きしたいものですわ。

それによってドレスも違ってまいりますし。どうおやりになるので

しょう、早くお聞かせくださいませ？　ねえ宰相閣下。」

と答えてあげた。

問題になるほどきつつい事は言っていないよ。

ウチの典礼部なんて私の顔見ると逃げ出すのもいるよ。

そいつは長続きしねえけど

そして、一気にまくしたててのどが渴いたので潤そうと近くにあった、グラスを取りあげて飲もうとして酒精のにおいに顔をしかめた、そうだ、まだ水ないんだっけ。とグラスをテーブルに戻してすこし遠ざける。

「…姫？」

そういつて宰相閣下が私に話しかけてくる。

気が付くと、さっきまでざわついていた会場がシーンとしている。

「お水はまだかしら？わたくし、のどが渴きました。」

給仕が控えている方に声をかける。

壁際に控えていた給仕の半数が脱兎のごとく出て行った。

一杯でいいんだけどな。

「それで、宰相閣下。どういう段取りですか？」

というか、式の主役である王子殿下はまあ、軍服ですみますからいいですけど。

わたくしの場合、支度に時間がかかりますのよ。

こちらにきてからこのような大事をお知らせくださるなんて、わたくしその場にそぐわぬ衣装で式典に出席して、恥をかかせて『典礼の姫などと呼ばれていても、あの程度だ』などと近隣諸国にいわせるおつもりで？」

そういつて手元の扇をパチンと鳴らすときつちり四分の一だけ開く

と口元に持っていった。

そして宰相にだけ聞かせるように小声で。

「正直わたくし、塩持って実家に帰らせていただきたくはありますわ。わたくしが10歳の時のデビュータント・ドレスのコピー着てるの貴方の奥方ですわよねえ。」

なんかの羞恥プレイですか？ てか御幾つですか？奥方。」

そうして、扇を口元からはずしてにっこり笑った。

「宰相閣下？段取りの方はいかがですか？」

「ここでご説明すると折角の晚餐がさめてしまつほど長くなりましよう。」

後ほど詳しいものにご説明にあがりますので、そちらに詳しい話はお聞きください。」

本当はここで追い詰めてあげてもよかったんだけど、さすがにそこまでしたら悪いしね。

私は矛を収めることにして、ぱちんと扇をたたんだ。

「楽しみにしていますわ。あと10日しかないんですもの。」

式次第とか手順とかもきっちり決まっていますので教えていただくだけで済むのですわよね。

当然。」

「御前、失礼いたします。」

そういつてロマンスグレーのソフトマッチョの宰相閣下は下がって行ってしまった。

私的にはザツチヨ王子よりも好みだけに残念だわー。

すこし顔色悪かったようだけど、だいじょうぶかしらー。

そろそろ無理のきかないお年頃のようにお見受けしました。
好きなタイプだけに長生きしてくださいませね。

「失礼いたします」

そういつてやっと私の目の前にお水が置かれた。
それもグラス5つも。

こんなに要らないわ。

なんか違うのかしら？

「あ、ありがとう」

引きさがる給仕にお礼をいう。

そしてまた3つのグラスが差し出される。

なんかこの水違うの？

それとも意地悪ですか？

並んだ8つものグラスを一つ一つ確かめながら慎重に口をつけるグ
ラスを選ぶ。

そして一番きれいなグラスから水を飲んだ。

なんだただの水じゃん。

あの温泉宿で飲んだ水、美味しかったなあ。

そのうち運ばせるかな。

ふう、やれやれ。

まだコースは半分か。

私のお腹に入るんだらうか？

1 - 10 (後書き)

最近この話を「しっかり姫とザツチヨ」と呼んでいる自分がいます
でも姫まだ15歳なんですよー！

しっかりしろザツチヨ。ってか最近名前がうる覚えに（、ー、A；
）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441u/>

或る政略結婚の実体

2011年9月8日11時26分発行